

# It と That の意味論的考察

—— その選択に関わる心理的要素を中心に ——

中村 聡

## 0. 序

前方照応的用法における *it* と *that* の選択について考察した前回の研究, 中村 (1996) では, 指示詞と人称代名詞の意味機能上の本質的相違に基づいた視点を提示したが, 両代名詞の現われるいくつかの環境について論考が及ばなかった。その続編として本稿では, より多くの用例の分析を通して, その分析法の広範囲にわたる有効性を主張する。

## 1. 中村(1996)について

本稿での議論に入る前に, ここで拙論 (1996) の要点を述べておきたい。*it* と *that* の指示特性の違いとして, Kamio & Thomas (to appear) は既獲得知識 (prior knowledge) と拡散指示 (wide reference) という2つの視点を挙げている。既獲得知識とは, 談話に導入される前から話し手が既に持っていた情報のことで, *it* の指示対象 (referent) は話し手にとって既獲得知識でなければならない。一方, *that* にはこのような制約はなく, 既獲得知識も, 話し手にとってまったく新しい情報も指示対象とすることができる。Kamio & Thomas のもう1つの視点は, *that* はその指示対象を狭く特定し (narrowly specify), *it* は広く指示する (refer broadly) というものである。

中村 (1996) では, Kamio & Thomas の研究成果と問題点を考慮に入れ, 彼らの以上の語用論的視点とは別に, 指示代名詞と人称代名詞の意味機能上の本質的相違として, *that* は指示詞であるから, 指示対象を指示集中作用 (pointing force) を伴って指示する (point at) のに対して, *it* にはそのような力はなく, 単に対象を示している (refer to) という視点を提示した。そして, この意味的相違は2つの副次的作用を生み出すことを主張した。1つ

は, that を使えば, 興味・関心・驚きなどの感情を強調して指示する (point emphatically) ことができ, it を使った場合は, そのような感情を強調せず中立的に対象を示す (refer neutrally) という作用で, 2つめは, that は指示対象を指で指し示すように特定するが, it は明確な指示対象を持たずに, 不特定に漠然と示すという作用である。

## 2. 分析・説明

ここから先は, 筆者が行なった英語母語話者へのアンケート調査の結果を重視しつつ,<sup>9</sup> 前節で示した it と that の意味作用の視点から, 中村(1996)で議論できなかった用例を中心に考察する。

2.1 節の (7), (10) 以外の例は Kamio & Thomas の反例とみなすことができる。その理由はまず第1に, これらのコンテキストにおいては, 最初の話し手によって導入された情報が聞き手にとっては既獲得情報であると考えられるのに, 聞き手は it を用いているからである。第2の理由は, 指示拡散性に関することだが, これらのケースでは, 最初の話し手によって示された新しい情報について, 聞き手がそれに関するさまざまなことを思い浮かべるような時間的・心理的余裕があるとは考えられないし, 筆者が尋ねた英語母語話者たちも, いわゆる指示拡散現象をこれらの例に関しては認めていないからである。

### 2.1. 強調指示の that vs. 平静指示の it

#### 2.1.1. it も that も可能な場合

(9) を除く (1)-(12) では, it と that に互換性があっても, 相手の発言内容に対する返答に it, that のいずれかを用いるかで, 重要な相違があることが筆者の調査から分かる。that を使えば, 指示対象である相手の発言内容を共感・同情や強い関心などの感情を伴って指示することになる。一方, it のほうは that のような指示作用を持たず, ただ単に相手の発言を中立的に平静に示していることになるので, 冷ややかで, そっけない反応として受け取られる可能性がある。

- (1) A: At this time of the year, we're really snowed under with work.  
 B: It's/That's a burden on you, isn't it?<sup>2</sup>
- (2) A: By the way, if you ever need my help, just let me know.  
 B: Thanks. I'll keep it/that in mind.
- (3) A: My dog was just bitten by a poisonous snake.  
 B: I'm sorry to hear it/that. Will he be all right?<sup>3</sup>

(1) において, *that* を用いた場合のほうが, A の仕事が大変なことを聞いて, そのことに強い関心を寄せ, さらには A の健康について心配しているという含みをも持つ。(2) では, *that* の使用は B が A の発言をより深く受け止めている, A の申し出を B が高く評価していることを示唆する, などの英語母語話者の見解が得られた。一方 *it* を使うと, B が A に実際に援助を求める可能性が高くないことを示唆する, A が B の望んでいないことを申し出ているという感じを受ける, などの指摘があった。

次の (4)-(6) における *it* の使用は, 第 2 話者が第 1 話者の誘いや要望に対して関心を寄せていないという感じを与える。<sup>4</sup> 特に (5), (6) では, コンテキストからそのことがはっきりと見て取れる。

- (4) A: Let's go to the zoo.  
 B: No, thanks. I'm not up to it. Today I feel very tired. How about sometime next week?
- (5) "Listen to me, Joe.... It's a matter of how much money I can get for you from Exxon. And ... nobody will get more than me. Nobody. Look. I'll advance five thousand now, and allow you to draw what you need to pay bills. Fair enough?"  
 "I'll think about *it*."  
 "Time is critical, Joe. We must move fast...."  
 "I said I'll think about *it*."  
 "Can I call you tomorrow?"  
 "No." (Grisham 1994: 86) (イタリックは筆者)
- (6) "But at this moment we really need to talk to your client."

"I'll think about *it*."

"When might you reach a decision?"

"I don't know...."

(Ibid.: 136) (イタリックは筆者)

(7) は, Kamio & Thomas が拡散指示の視点を用いて説明している例である。<sup>5)</sup> 彼らは "Carl" の "I hope it will make you very happy, my dear." という発言において, *it* は「この転勤は君にとって重要な昇進を意味する」「君はサンフランシスコで新しい友人ができるだろう」「この転勤は2人の関係に大きな変化を与えるだろう」などを広く示すことができる, と述べている。

(7) [Alice and Carl are long - term housemates, whose relationship has been troubled recently. Alice comes home one evening to confront Carl with some news.]

"Carl, I have something important to tell you. Mark called me into his office this morning and said he wanted to give me Gino's job. He made me a great offer and I accepted it. But of course I'll have to move to San Francisco."

Carl stared at her in silence for a long moment. Then, forcing himself to speak calmly, he said softly, "I hope it will make you very happy, my dear."

(Kamio & Thomas (to appear): ex.(12))

しかしながら筆者の調査では, このことを指摘した人はいなかった。むしろ, *it* を使えば, "Carl" が "Alice" の述べたことを聞いて, うれしく思っていない, さらに怒っているというように解釈でき, *that* を使えば, 彼が彼女の報告をよろこんでいることがうかがえ, 彼らがこれからも友人であり続ける可能性が示唆される, と言う人が少数ながらいたという事実注目したい。

(8) の *it* は *that* と交換可能で, どちらを選んでも大きな意味の違いはない, というのが多くのインフォーマントの見解であり, LDOCE (1995:

481)でも “it/ that depends” とある。しかし, that を使ったほうが相手の発言内容をより重大な問題 (stronger, bigger issue) として受けとめている印象を与える, という指摘が数名からあったことは, 筆者の主張を裏付けるものとして見逃せない事実である。

(8) “Are you going to visit him?”

“Well, it depends.”

(LDOCE 1996: 481)

ところで, 筆者の調査で多くの人が述べているように, doubt という動詞と結びつく場合, it が選ばれるほうが普通である。<sup>6)</sup>

(9) “Do you think there’ll be any tickets left?”

“I very much doubt it.”

(LDOCE 1995: 534)

その理由は, インフォーマントの1人が指摘するように, that を使うことは, ばかげた疑問やありえない発言内容への懐疑を強調的に示すことになるからではないだろうか。<sup>7)</sup>

次に挙げる (10) は, it/that の使い分けが(1)-(9)程の感情的要素を伴わないものとして考察できる。

(10) You have done your best, and we all know it/that.

(10)の第2節において that を用いた場合,微妙ではあるが, (10)の話し手または書き手が第1節において述べられた内容に対して, さらに話を続けるという含みがあり, 他方 it はこの話題については話を終えることを示唆するという。この現象も that の強調指示性という観点から説明できることは明らかである。

### 2.1.2. it のみが現われる場合

it を使うことがつねに否定的態度を示すとは限らない。(11)および(12)の第2文では that を用いることはできない。

(11) "I left my money at home."

"It doesn't matter. You can pay tomorrow."

(12) "Shall we have red wine or white?"

"It's up to you."

(LDOCE 1995: 1994)

これらの慣用的表現を分析するに際して、次のような説明が可能だと思われる。すなわち、itを使うことによって第2話者は、第1話者が述べたことに中立的距離をおいて、自分の第1文の内容への関与を弱めることを伝えられるからではないだろうか。

## 2.2. it の持つ非特定性

it には that のように指示集中作用がなく、ただ対象を示しているという性質が、明確な対象を持たずに不特定に漠然と示すという副次作用を生むことは、中村(1996)で論じたことだが、本稿では it の不特定度には2段階が認められることを指摘しておきたい。

### 2.2.1. 漠然と示す it

特に先行詞は持たないが、何を示しているかは場面によって分かる it であり、一般に場面の it (situation *it*)と呼ばれているものである。不明確な対象を漠然とではあるが、先行する発言の中から無意識に選び出すという it の働きが観察できる。この点について詳しくは中村(1996: 80)を参照されたい。ここでは用例を挙げるにとどめておく。

(13) "Who's calling please?" It was a female voice, almost like a robot's.  
(Grisham 1994: 41)

(14) A: May I speak to you now?

B: Certainly. What is it?

(15) A: How can I ever thank you?

B: It's my pleasure/quite all right/nothing.

(16) I'll have a coffee please. Oh, no, on second thought, make it a beer. (LDOCE 1995: 1624)

(17) How's it going Bob? I haven't seen you for ages. (Ibid. : 965)

(18) (B knocks the door)

A: Who is it

B: It's me.

(19) (Phone rings/There is someone at the door) I'll get it.

(20) Watch it! You nearly knocked my head off with that ladder.

(LDOCE 1995: 2035)

ただし、次の2例については上で挙げた用例とは異なり、it は文中に現われる後続の節や動名詞句を示しているとも考えられる。

(21) Come to think of it, he did mention seeing you.

(OALD 1995: 1241)

(22) I can use a computer, but when it comes to repairing them, I know nothing. (LDOCE 1995: 354)

## 2.2.2. 虚語 (empty word) としての it

非特定度がさらに進んだものとして、それ自体は意味を持たず、文法形式として機能している it があり、2.2.1 で挙げた、話し手の心の内にある何かを示している it とは区別されるべきである。(23)-(26) のような慣用的表現で動詞や前置詞の目的語として用いられる it がそれに当たる。<sup>9)</sup>

(23) I never thought Clare would make it as an actress.

(LDOCE 1995: 1097)

(24) I'm afraid I won't be able to make it to your party next week.

(OALD 1995: 709)

(25) I usually bus it to work in the morning. (Ibid. : 151)

(26) He likes to lord it over the the junior staff. (Ibid. : 697)

### 3. 結び

本稿は中村（1996）の続編として、thatは対象を指示集中力を伴って強く明確に指示するのに対して、itにはそのような力はなく、ただ対象を軽く示しているという違いに基づいた視点によって、it/thatの現われる環境をより広く説明することを試みた。しかし、それでも両代名詞に関するいくつかの言語現象で十分に説明しきれないものがなかったわけではない。<sup>9)</sup> 本稿で提示した視点の応用で論じることが可能なのか、それともまた別の視点が必要なのが今後の課題となるだろう。

### 注

\* 本稿をまとめるに当たりご助言をくださった成城大学の吉田正治先生、五十嵐康男先生に感謝申し上げたい。また、筆者のアンケートに答えてくださった方々の中で、特に Daniel Panamaroff 氏にはその名を記してお礼のことばとしたい。

- 1) 16人の英語母語話者から回答を得た。インフォーマントにはアンケート形式で、itとthatが使われているコンテキストでどちらの代名詞が適当と思うかを尋ね、そしてその理由についてコメントしてくれるようお願いした。11人が英語または言語学の大学教員、4人が英会話学校の講師、そして中学校の外国語指導助手（ALT）が1人である。出身国はアメリカ合衆国（9人）、カナダ（4人）、英国（2人）、オーストラリア（1人）である。
- 2) 出典が記されていない例文は、その多くがテレビ・ラジオ・映画などで筆者が耳にした会話からのものである。また少数ではあるが、筆者自身で作ったものもある。これらの例文については英語母語話者のチェックを受けたことは言うまでもない。
- 3) この例文については中村（1996：73-74；78-79）で詳しく論じているので、そちらを参照されたい。
- 4) 筆者のインフォーマントの1人の指摘によれば、(4)でthatを用いれば、Bが「感っている（annoyed）ように聞こえるという。このことは、

Bが that を使うことによって、Aの誘いに対していくらかの関心があることを示している、という解釈を支持するものと考えられる。

- 5) Kamio & Thomas はまた、(7) について既獲得知識の概念を用いて説明を試みている。明らかに Carl は、Aliceの発言の前には Alice の情報についての既獲得知識を持っていないにもかかわらず、it が使われている理由として、Kamio & Thomas は、Alice の発言から Carl の発言の間に “long moment” があるので、Alice の発言内容は Carl にとってまったく新しい情報ではなくなるのだ、と述べている。
- 6) 似たような決まり文句に “I can't/don't believe it!” があるが、ここでも同様の説明が可能に思われる。ちなみに Kamio & Thomas はこの表現が彼らの理論から逸脱していることを認め、イディオム(idiom)として機能しているのではないかと述べている。
- 7) このインフォーマントは that を使った好例として、次の会話を挙げている。

A: Maybe it was a ghost.

B: I very much doubt that!

- 8) この他にも、後置される語句を代表し、先行して置かれる予備の it (preparatory *it*)、天候・時間・距離などを表わす文に用いられる非人称の it (impersonal *it*) が虚語としての it の機能をもつ。
- 9) Kamio & Thomas は次の(i) と(ii)において、it は “the strike” を示し、that は “the authorities' regret of the strike” を示す、と主張している。その理論的根拠として、“regret” の目的語の “the strike” は話し手にとって既獲得知識であるから it で示せるが、初めの等位項 (conjunct) で述べられていることは既獲得知識ではないため、it は使えないと Kamio & Thomas は述べている。

(i) The authorities regretted the strike, but it was inevitable.

(= Kamio & Thomas (to appear), ex.28)

(ii) The authorities regretted the strike, but that was inevitable.

(Ibid., ex.29)

この言語事実について、筆者のインフォーマントの中で回答した人と Kamio & Thomas の主張はほぼ一致していたが、この現象を筆者が主

張した視点から説明することは、現時点では難しい。Kamio & Thomas 以外の視点としては、成城大学の吉田正治教授の、it は名詞句 (noun phrase) を、that は節 (clause) を指示対象とする傾向があるのでは、という指摘は、次に挙げる2つの興味深い研究とも通じるのではないだろうか。

Channon (1980) は、先行詞 (antecedent) となる名詞句の量が増えて複雑になるにつれて、それを示す代名詞が that になる可能性が高くなる、と主張している。

- (iii) a. Don likes skiing. Steve likes it (?that), too.
- b. Don likes skiing and skating. Steve likes that (??it, ??them), too.
- c. Don likes skiing, skating, tobogganing and participating in winter sports in general. Steve likes that ('it, 'them), too.

(Channon 1980: 105)

(iiia) の “skiing” は単数形で示される単数名詞であるので、it が選ばれることになる。(iiib) は2つの動作の連結 (concatenation) と考えられるので、it の複数形の them もどうにか可能であるが、that を選ぶのがもっとも自然である。しかし、“skiing and skating” を1つにまとめられた動作 (a single compound action) と捉えるならば、it を使うことも許される。(iiic) になると、名詞句化された動詞の量と複雑性がさらに増すので、that のみが可能となる。これが Channon の説明である。

これと関連があるように思われるのが、指示詞がそれに先行するいくつかの文ないしいくつかの段落、あるいは数分間に及ぶ談話の内容全体を指すことができるのに対し、代名詞 it はその直前の内容しか示すことができない、とする Gensler (1977) の考察である。なお、今西 & 浅野 (1990) は Channon (1980) と Gensler (1977) に言及し、彼らの指摘を支持している。

以上の議論がはたしてどの程度の説得力をもつかは、実際に多くの英語母語話者の意見を聞いたうえでないとはっきりしないが、本稿で主張した視点でこれらの現象を説明することが現時点では困難であることは認めざるをえない。

## 参照文献

- Channon, R. 1980. Anaphoric *that*: a friend in need. In Kreiman, J. and A.E. Ojeda ( eds. ), *Papers from the Parasession on Pronouns and Anaphora*, pp. 98-109. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Gensler, O. 1977. Non - syntactic antecedents and frame semantics. *BLS* 3: 321-34.
- Grisham, J. 1994. *The Client*. New York: Dell Publishing.
- 今西典子・浅野一郎. 1990. 『照応と削除』(新英文法選書 11) 東京 : 大修館書店.
- Isard, S. 1975. Changing the context. In Edward L. Keenan ( ed. ), *Formal Semantics of Natural Language*, pp. 287-96. Cambridge: Cambridge UP.
- Kamio, A., and M. Thomas. (to appear) Some referential properties of English *it* and *that* . In Kamio, A. and J. Whitman ( eds. ), *Function and Structure* . Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Linde, C. 1979. Focus of attention and the choice of pronouns in discourse. In T. Givon ( ed. ), *Syntax and Semantics*, vol. 12, pp. 337-54. New York: Academic Press.
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 1995. 3 rd ed. Director D. Summers. London: Longman. ( Abbr. *LDOCE* )
- 中村 聡. 1996. [前方照応代名詞 *it* と *that* の選択についての一考察] 『成城英文学』第20号, pp. 65-82.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. 1995. 5 th ed. Editor J. Crowther. Oxford: Oxford UP. ( Abbr. *OALD* )
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.